

# 女王は英王室が犯した罪を免れない

ブリジャムバーダ・ゴパル

アルジャジーラ 2022年9月14日

[Queen Elizabeth is not innocent of the Crown's crimes | Opinions | Al](#)

[Jazeera](#)

長寿のエリザベス二世が亡くなって以来、英国の公共空間は陳腐な決まり文句の波に飲み込まれてしまった。女王は人々を結びつける接着剤だとか、奪われたものの一部だとか、生活の中で唯一の安定した存在だったという言葉、これでもかとはばかり繰り返し聞かされている。そもそも私たちの社会的存在は、会ったこともないたった一人の女性が「継続性」と「安心感」を与えてくれるほど、もろく不安定なものなのだろうか。そんな質問はしない方が良い。軽い反対意見でもすぐに封殺されてしまうからだ。反君主主義のプラカードやスローガン掲げただけで、すでに何人かが逮捕されている。

女王の知名度と長寿を考えれば、多くの英国人が彼女の逝去に悲しみを感じるのには理解できる。しかし私人として悼むことができるのは、実際に彼女を知っているごく少数の人たちだけだろう。それなのに、この死は英国だけでなく、

英連邦、そして世界全体にとって深い意味を持つことだと、繰り返し言われている。

英国の植民地だった英連邦の住民には不安定な生活を送っている人たちがたくさんいる。大見出しで報道されることはないが、彼らは壊滅的な洪水や飢饉と必死で闘っている。だから遠く離れた女王の存在に「安心」することもなければ、率直に言ってその死去に煩わされることもないだろう。英国人だって弱い立場の人々の多くは、この冬、平穩とは程遠い病気や死に向き合うのだ。

英国のメディアが自己陶酔的なスタンドプレーをするのは当然かもしれない。彼らは多様な意見を育むことでは知られていないからだ。看板やバス停、地下鉄の駅、モール、映画館、大通りには女王の大きな肖像画が連綿と貼られ、毎日のように公の式典や仮装の野外劇が行われる。それは、全員に一致した礼拝を求めるある種の強制である。新国王チャールズ3世はかつて、これを非西洋的な国と結びつけて「ひどいソ連式展示」と表現した。女王の画像は現在、多くの職場のスクリーンセーバーに自動的に表示されている。驚くことに、全米の多くの学者が雇用主から、ソーシャルメディアを使用しないようにとか、発言は慎重にするようという注意を受けている。

このような合意形成がまんまと成功している。そのことは、自分は君主論者でないという人たちが語る穏やかなレトリックを聞けばなお明らかになる。彼らは「君主制をどう思おうとも」と前置きしながら、亡くなった女王について「義務」「忠誠心」「気品」「威厳」「無私の奉仕」といった資質を列挙して、これには私たち全員が同意すると賛辞を送るのである。

そして、調査のための質問に答える際には、人々はエリザベス2世が「国家の母」であるだけでなく、ひとりの「母であり祖母」であることを思い起こさせる。「人間」を制度から切り離し、「家族」を「君主制」から切り離すことによって、（王室）制度を精査させないようにする。これは長い間うまく使われてきた戦術だ。結婚、出産、離婚、確執、死といった人間ドラマに捕われて、人々はより根本的な問いを立てられなくなる。例えば、君主の「義務」は最終的に誰のためなのだろうか、といった。

コーギーやパディントンベア、マーマレードのサンドイッチや馬の話をごまかされても、植民地時代の戦利品をちりばめた王冠をかぶった人間を知ることには決してできないだろう。君主制こそ、多くの人がエリザベス二世に接する際

に、必ず使わなければならない唯一のレンズだった。それ以外の方法を彼女が望んでいたとは考えにくい。実際、彼女が賞賛される「義務」とか「無私」という価値には、個人としての彼女を後退させ、制度を体現させることが必要なのだ。女王を王室から、ひいては英国の国家から切り離すことは、まったく辻褃の合わないことなのである。

エリザベスの治世が終わるのに伴って、アイルランドからナイジェリアまで、主に旧植民地の住民たちから、植民地化や奴隷化、年季奉公や収奪、民族浄化や暴力に対する王室の責任について公然と批判がなされるようになった。また、王室の富の源泉は不透明なまま隠されているものの、その富が奴隷化、植民地化の事業と密接に結びついていることも指摘されている。

そのことを完全に否定できない場合は、女王の即位以来、帝国は、完全とは言わないまでも徐々に解体したので、女王は帝国とは切り離して悼むことができるといふ人たちもいる。ある解説者は、女王は「帝国というステレオタイプのアンチテーゼ」であり、英国なるものの最も陽の当たる面だと考えている。

これこそ、歴史を塗り替える方法なのだ。1952年、ケニアのサファリロッジで即位を知らされ、「偉大な王室」に献身することを誓った若きエリザベスは、英国が反乱に対する長く残忍な鎮圧作戦を始めていたことを知らされていた。これにより罪のない何千人もの人が投獄されて拷問を受け、処刑された。それは、型にはまらない緩やかで平和的な非植民地化などとは到底いえないものであった。

彼女の治世の最初の頃、英国は、キプロス、マラヤ、その他の地域で、反植民地主義運動を徹底的に弾圧した。だが植民地での平和的な、あるいは暴力的な抵抗によって、次から次へと帝国の事業を放棄せざるを得なくなった。女王は大英帝国やその残虐行為から離れることはなかったものの、反植民地主義のナショナリズム、あるいはハロルド・マクミラン首相の言った「変化の風」の現実を受け入れたことはよく知られている。だからといって、彼女が、支配した国に独立を付与したわけでも、支配を緩めて国家にしたわけでもない。

英国の支配階級は、帝国が権力を失うことについての物語をコントロールしようと躍起になった。そして脱植民地化を、管理され計画されたプロセスであるという神話を作り出した。エリザベス2世は、この神話の中で最も重要な役割

を果たし、アフリカ民族主義者と白人入植者のような対立する集団の仲介役となった。

彼女が深く献身を誓った「英連邦」は、帝国のアンチテーゼではなく、「偉大な王室」が一夜にして女王（現在はチャールズ）を頂点とする「英連邦」となるためのはぐらかしの一部だった。これは退却ではなく、英国が本来持っていた文明開化の使命の遂行だということである。

神話が厄介なのは、歴史に正直に向き合うことを妨げるからである。エリザベス二世は「我が国の過去にあった困難なエピソード」と持って回った表現をし、再訪すべきではないと明言したが、このような態度は、英国が今陥っている帝国についての健忘症とその風潮を強めるだけである。大英帝国がもたらした有害な結果は、現在もなお何百万人もの人々の生活に影を落としている。それなのに、それを認めることなく賞賛するのである。キャメロン元首相がかつて言ったように、奴隷にされ植民地にされた人々の子孫は、「この痛ましい遺産から離れて前進する」よう繰り返し勧められるのである。

最近、カリブ海を訪問したウィリアム王子とキャサリン妃にジャマイカの人々が公開書簡をだした。その中で人々は、女王はこの遺産について国民的な考察をリードすることができたのに、そうしなかった指摘した。また、現在の王室は、「アフリカ人の人身売買と奴隷化に由来するものを含む」歴史的な富の蓄積の「直接的な受益者」であるとも書かれている。これだけは議論の余地がない。

女王は、王室の富（継承されたものであれ、そうでないものであれ）を精査の対象にするどころか（驚くべきことに、このテーマについての研究はないようだ）、「『恥ずかしい』個人資産」を国民の目から隠すために政府に働きかけ、法律の草案をまんまと変更させた。さらに女王は個人的に盗品や略奪品の搜索を免れ、人種や性差別を禁止する法律からも引き続き適用除外されることになった。

女王の個人資産は、数億ポンドに及ぶと考えられているが、その正確な額は不明のままだ。しかし、この富は単に歴史的なものばかりではない。興味深いことに、英王室は自らを「ファーム（会社）」と名乗っている。他の多くのグローバル企業と同様、税金を避けるためにオフショア投資を行っている。愛国心

に満ちた讃美歌を歌っているのに。チャールズ 3 世が母親から受け継いだ遺産も、相続税が免除される。

巨大な富の政治こそ、英王室とその王位に就いた女王について理解する上で、最も重要な問題である。詩人パーシー・ビッシュ・シェリーが「強盗の束を結ぶ紐に過ぎない」と表現したように、王政、そして王室の究極の目的は、富める者と権力を持つ者の支配権を明白にすることである。

「統治」ではなく「君臨」することを見せびらかして敬意を強制することは、富豪階級に「伝統」の正統性と、さらにはこの権利の神聖さの承認さえも与える。封建制の最も古い形態を続けながら、女王は国内最大の私有地所有者の一人であった。このどれもが時代錯誤ではない。なぜなら英国王政は、古い富と完全に近代的な寡頭政治の接点に心地よく座って、国民に慈悲深い施しを振り撒いているからなのだ。

とはいえ、共和主義者を自認する人々ですら、英国のようにグロテスクな程の不平等社会をそのまま維持しながら、選挙で選ばれた国家元首や政府を持つことが完全に可能であり、実際に規範に従ったものであることを認めている。ア

アメリカ人が英国の君主制に魅了されているのは、ごく少数の億万長者が、任命されていない君主として、国の富の半分以上を所有しているという事実からも説明できる。より民主的で平等な世界を望むなら、廃止されるべきは英国王政だけでなく、金権政治そのものである。（了）

筆者のプリジャムバーダ・ゴパルは、英ケンブリッジ大学英語学部教員。インドの独立運動や反英運動についての著書多数。

【翻訳 田中 靖宏】